

たった一人の老人が暮らす集落に 驚く

関西学院大学総合政策学部角野ゼミで集落の調査に取り組み塩山さん(4年)、奈良元さん(3年)、足立さん(3年)。

奈良元さんは山口県出身。都会で育ったが、祖母の住む集落が小規模集落だったため、中山間地域の集落の課題に関心を持った。足立さんは青垣町の出身。自分の出身地域を考えると放っておけない問題と感じ、集落の問題を調べてみたいと思ったという。

集落の特徴、農村の印象については、「人が少ない。」と感じたと

いう。また、皆が顔見知りであり、出身も分かっているという、「絆の深さ」を感じたという。

塩山さんは大阪市の出身だが、自分の生まれ育った場所も結構地元の付き合いやお年寄りの結束が固い。農村と変わらない。だから、農村で暮らすことに抵抗はないという。だが、決定的なのは仕事がないという点であり、調査の中で課題と感じたという。

一番印象に残った集落は竹野町の段だ。おじいさんが一人しか残っていない集落。ほとんどの家

が崩壊した中でそのおじいさんの家だけが建っていた。「どうやって暮らしているのだろうか」と衝撃を受けたという。

今年度で学部を卒業する塩山さんは今年の経験を生かし、大学院でさらに集落のことを学ぶ予定だという。



関学で集落の調査を進める塩山さんら

作成

兵庫県企画県民部政策室ビジョン担当課長